

ミオヤの光

更生の巻

- 1、靈に活きる念佛
- 2、念佛三昧に明鏡を磨せよ
- 3、心本尊
- 4、恭敬と愛慕
- 5、光は心靈を愛育し給ふ力
- 6、恩籠發得
- 7、恩籠發得の二縁
- 8、清き心に生れ更るが一大事
- 9、ミオヤの幼君を即位せしめよ
- 10、假のやど
- 11、自業自得
- 12、釋尊の出世
- 13、ミオヤの慈悲
- 14、ミオヤのみもと

靈に活きる念佛

宗教心を成立して宗教的の目的を達せんには安心、即ち心の安置かたが大事である。此安心にして過たば起行の功果なし。光明主義の念佛安心は一心に念佛すれば如來の光明を蒙りて攝化せらる。即ち卵の孵化する如くに我人の心靈が靈活す、即ち信心が生れ來る、如來慈悲の光明は念佛する處に加はり、如來の憶念衆生と衆生の佛を念するあたゝかなる處に心靈が躰北す。その念佛するに就ての安心が、必ず一心に念佛する時は心靈復活すと信じ彌陀は我等念佛衆生の心靈を靈活せしめ玉ふと深く信じて念佛する時

は必らず靈に活き、靈に生るゝこと必せり。安心が信仰の死活を致さしむ所以こゝにあり。若し念佛すれば現世には別に心靈上に及ぼさざるも死の覺悟となると云ふが如きまた死後の往生だけを期する如きは即ち安心が人の心靈の復活を妨げて心靈的に死なむ。故に安心は例へば彼の催眠術の暗示に類す。術者が被術者に對して汝が病氣は必らず治る、汝を活すと暗示すれば被術者も之を信じて必らず其病氣治す。若し反對に汝が病氣治せずと暗示を與ふれば必らず全快せず。此暗示は人の信仰を死活の何れかに分たしむる所以。また家庭に於て其子女に對して汝は善くない汝は意氣地ないといつて意氣地なし／＼とつねに何事に就ても意氣地なしと咄して計り居る時は其子には其子の爲めに自然と暗示と成りて其子は性質を變化して全く意氣地無しに化して任舞ふ。其と反對に汝は敏利なり能く汝は氣がつく汝は氣が敏いてをると其暗示を以て精神を引立る時は其子は全く敏捷の性質に化すと云ふ。

されば世の宗教家が其信者を靈的に活かしまた靈的に死なすかは最も大事の事なり。今日世間の教育家の傳道宣教の法を見るに全く信者を靈的に殺してをる。靈的に活す傳道家無きは概歡の至りなり。

されども光明主義は人を靈的に活す爲めに道を宣ぶ教を布く。苟くも人の心靈を活す暗示に非ざれば與ふべからず。彼の死的傳

道者の如く人の心靈を殺すべからず。不殺を戒と誡めながら心靈を殺す罪五逆よりも重きことを自覺せよ。

人を靈的に活すことに努力せん、靈に活きたき者は我に來れと叫ばん。

念佛三昧に明鏡を磨せよ

念佛、南無の一心の對象には彌陀常に現在す。彌陀は必らず在せども衆生思想の鏡曇るが故に現前せず。然らば云何にして一心の鏡を明淨にして如來の身色相好を映現することをうとならば、衆生鏡を磨くは只だ念佛三昧のみありて能く心鏡を磨きて明淨ならしむ。

念佛三昧とは衆生の一心と如來心との合一的其兩方の間に寸隙もゆるさざるなり。念佛三昧の能く純熟する人の心は明鏡の如し。然るに其修練の一心の用心に於て巧妙なる者と拙劣なる者あり。例へば鏡は磨くに巧拙あるが如し。また能く劍道の達人能く奥妙に達する者は一寸また五分の隙を見せずと云ふ。全く物我無二となりて如來と我と合致して寸隙なきに至る其樞契の機は深玄言語を以て傳ふべからず。世の宗教的天才なる者は其本能的に一心が對象の境と契合して自づと三昧の境に入ることを得る者あり。然るに天才の人は稀なり。たとひ宗教素質に乏き人にて一心に自

己の業障の甚深なることを自覺し尅已摧勵して一心に勇猛精進にして不屈不撓ならば、必らず從來の不靈態なる己が心機を打破して奥底に潜伏せる靈性現前して一心の明鏡明淨に爲らん。故に天性拙なりと雖も必ず自棄する勿れ。また縱令天才豊富なるも一心に摧勵せざれば眞實の妙をうることはす。

心本尊

吾人の宗教的意識の内觀を暫らく告白せば、行住坐臥に於て一切の處一切の時に於てフト自己の唯一なる如來を念すれば無上尊なる如來は威神巍々として靈體に在ます之に對する觀念は神聖にして自然に歸命頂禮の念禁する能はず。如來を念ふ時は夜半床中に臥すとも神聖にして儼然し玉ふ御前に自ら低頭し歸命の念に耐へず。また須臾も念じて如來の慈悲圓滿の尊容笑顔の赫々たるを思念する時は身心融液にして不可思議の感あり。

また夕陽の赫耀として光る時に西方の空を心眼を以て瞻望する時は、彌陀の慈顏赫耀として青蓮の降丹果の唇が心眼の前に現はるゝ時は身心融明にして靈感極りなきを覺ゆ。

圓光徹照せる眞金色、端正無比なる尊容が心眼の前に現はるゝ時は靈感言語の及ぶ所にあらず。

恭敬と愛慕

如來を無上尊と尊崇し常に如來を愛慕して止まざる信念の心理には相反せる二つの心理が活動してをる。如來に對する敬と愛である。

吾人はいかに考ふるも宇宙間に絶對的に尊崇して眞實に無上の敬恭を捧ぐべき對象は唯一である。此は絶對的の尊なるを以て他のすべてに比すべきものはない。尊崇性を以て如來を、無上尊を恭敬する時は尊敬は如來と吾人の間をなれ近づくことを免るさず。尊敬は益す進むに隨つて如來は高きにつきて符み自己を卑下して謙遜す。然る時は尊敬は敬深ければ深きに隨つて距離が大きくなる。宗教上の愛慕の情は其反待に如來を愛慕憶念して益す深厚なるに隨つて益々接近し相抱擁して融合の状態に到らざれば止まぬ。敬は昵み近づかず愛は親みて遠ざけず。

此兩の心的活動は反待にして一は昵ます一は離れずして反待にして而も兩者は宗教上の好一對の心的活動にして左と右との如く相待にて完き宗教心を成す。如來は絶對無上尊にして無上の尊敬を拂ふほかまた如來を愛樂する情は進むなり。然れども世に敬有つて愛なきあり愛して敬せざるありまた敬愛共に行はるあり、宗教心は愛と敬と共に活動して始めて眞の價ある宗教心となる。

光は心靈を愛育し給ふ力

吾人の常恒に内觀的本尊と爲つて吾人の信仰の對象として常に吾人の宗教心を導き玉ふ者は宇宙唯一の彌陀尊にて在ます。吾人が宇宙の中心本尊は無限の光にて永恒の生命なる無上尊なり。

如來は神聖と正義と恩寵との靈徳を以て常に吾人の頂を照らし玉ふ。神聖に對して吾人は眞に威神光明侵すべからざる感あり。是吾人の尊崇性を照して歸命頂禮せしめ玉ふ。威力あることを信ず。吾人は神聖なる智慧の照鑑の光にて正知見を興へられて、如來の聖意を以て吾人の意志とし、吾人の神聖の光明の中の行爲は如來に向うて、眞善美の極致に向つて進趣することを得。正義は如來の聖意は惡を捨て善を選び邪を捨て正に歸し非を避け善に就かしむる勢力なり。故に吾人が此靈性に照らさるゝ時は自然と聖意の如くに如實に如來の聖道に進むことを得。

恩寵としての如來は慈父や慈母のその子に於ける如く無上の慈悲を以て吾人を愛攝し玉ふ。此靈徳に對する時は實に有りがたく感じられたいとあたゝかなる慈愛に抱擁せられて自づと如來の愛に融合す。此靈徳は吾人の心靈を愛育し玉ふ力なり。

我等が信仰する如來は吾人が最も尊崇すべくまた最も愛慕すべき人格的神尊なり、如來正義(威神の光)を以て吾人に儼然し玉ふ

方より見れば最も尊敬すべく實に如來は神聖にして侵すべからず。吾人は如來の神聖なる光の宇宙間一切の尊き格上よりも尊く絶對的に尊きを感ず。こゝに於て吾等が眞面目なる宗教心は絶對的の如來に對する尊崇心に依て成立す。如來は我らが最も愛慕すべき人格尊なりと感ず如來は恩寵を以て我等衆生を愛し玉ふこと母の子を思ふよりも甚だし我等が心靈の佛性は元より佛の子なりまた佛の子たる靈性は只如來を愛慕し憶念する信仰に由てのみ育つなり。

恩寵發得

恩寵發得とは三昧發得ともまた靈性開展とも聖靈感得とも種々に名けらるゝも歸する處神人合一の實致にして靈の生命に入るの事實なり。如來の恩寵によりて自己の靈性を發き心光を自己の物とするにあり。假令宗教の意義を理解する共全く發得するに至らざれば活ける信仰と云ふ可からず。

恩寵發得の因縁は自己の信仰を因とし如來の恩寵を縁とし因縁成熟する處に於て初めて恩寵を發得す。喩ば木は燃て火を發す可き性を有するも、或は他の木と木と摩擦して火を發するか亦は他

の木に燃つゝある火より傳はりて自己火を發するかの如し。就ては恩寵發得の規定に先づ因なる自己の性の信仰と如來の恩寵の關係を研究せんに人の性には如來の恩寵を發得すべき性が本能に具備せり。如來の光明の縁によれば受得らるゝ性を因と爲。また宇宙の法界には人の信仰に對して絶對なる力を與ふべき勢力あり。之を恩寵といふ。宗教上の靈的關係を更に喩を以て例せば人に目あり外に日光あり目と日光の因縁によりて能く物を見うるが如しとの華嚴の説の如く、假令日光は常より照せども目なき時は視ること能はず。自然界の太陽に例ふべき心靈界の如來の光明は常恒に照耀しつゝあるも、信仰の眼まだ開けざれば此靈の光明を意識するに由なし。信仰の心眼開けて如來靈光の中に精神生活を爲すに至れば凡て天地萬物若しは自然界の方面も靈界に通じて現在より永遠に貫きて悉く如來の恩寵にあらざるは無きことを實感するに至るこれを恩寵の發得と爲す。

恩寵發得の規定に因と縁との理を明さば、因即ち人の信仰心に如來の光明を得らるべき性ありて此の因性に二種あり遠因と近因なり。遠因とは一切衆生の本性本一大法身の分子なれば原始的生物の源より靈性の伏能を具有すこと云も敢て不可ならざらん。之を佛教に一切衆生悉有佛性と示さる。此靈性具備すれども潜伏態にして直に顯動態を爲すにあらす。衆生の遠

因佛性は平等なるもこの佛性を開發す可き如來の恩寵を發得するには精神が高等に進化しての後になるべし。近因とは人の靈性が豊富にして如來の恩寵を發得するに適當なると不適當なるとの二素質あり。靈性豊富即ち宗教的天才とも云ふべきものは自然に宗教信仰に感じ易く亦自から天の一方に靈光を憧憬し靈的信念の自己より衝動するものなり。或はまた一向鈍愚にしていかに他より施すも信仰の起らざる機類あり。また世智辨聰にて世智は通常に超て利智なるも靈的信仰には心に感じ難きあり。

此ら其稟性の殊なるは或は佛教にて宿因と云ひ世間に遺傳素質と云ふ宿因と見做すも遺傳素質と云ふも人の性に宗教に適不適あるは事實なり。各自の先天的に宗教的素質の豊否はあれども人間として全く遺傳素質的の信心性能無きはあらざるべし。近因なる祖先來の遺傳恩寵が因として人には宗教の信仰を發得出來たるものとし之を因と爲す。

如來の恩寵即ち一大靈力また本願力とも攝取の大光明とも云ふ名は種々にあれども要する處人の信仰心を救けて満足にし啓示し悟らせ苦を抜き樂を與え惡をさけ榮に向日葵の如く光明に不満より満足に不靈より靈的に卑劣より高尚に有限より無限に人の信仰を滿しむる靈力の存在もまた當人の經驗に訴へて證する處なり。之を如來の恩寵と爲す。教祖釋尊の靈に滿てる精神狀態聖法然の

圓滿なる靈的生命彼の聖者等の信仰心に滿ちしむる者即ち是如來の恩寵なりまた心光なり。

例ば月には光なし然れども太陽の光に反映して皎々として照す如く彼の聖者の人格に如來の靈光の反映して心靈皎々として靈光を放ちしに非ずや。宇宙に斯の如きの一大靈光また恩寵の赫々として照耀せるは實に百倍の日月の雙照よりは明かなり。斯の如きの靈光は常恒に照るも之を知りて斯靈光を以て自己の生命として靈的生活するには斯光明の靈力を被りて靈性發得するにあらざれば悉く自己の靈を爲す能はず。

靈光を受くる人の信仰即ち因に二因ある如く大靈力の恩寵もまた三緣あり。大より云はゞ一無緣。二法緣。三衆生緣の慈なり。初め無緣の慈とは本有法身常恒無量光より無始無終常恒に十方界に照耀する永遠のロゴス、十方三世に亘りて微毫も其の靈力の滿ざる限なし。特に彼佛光明無量にして十方の國を照すに障礙する處なし故に阿彌陀と名く。また無量壽佛光明顯赦にして十方を照耀す諸佛の國土に聞へざる處なしと云々。

如來第一義の恩寵は絕對にして規定なく一切の處とて緣せざる處なし故に無緣の慈と云ふ。無緣とは規定なく自然に一切に緣せざる處なき故に無緣と云ふ。積極的の無規定に一切に緣する處なり。如來第一義絕對本有の一大靈力法界に充滿すれども因緣に規

定せらるゝ世界の方面に約束せらるゝ衆生の爲には第二義の規定によりて被らしめざれば恩寵を得ること能はず、そこで絶対本有の無量光より世界衆生の爲に遠くは法藏因位の大願を起し迷子を憐む慈悲より、因果の規定に約束せられて六道生死に流轉する衆生の爲には同じく因果の法則に準じ衆生の贖罪に無量劫の苦患を受けても忍で悔ひじとの願成就して正覺果滿の十劫正覺と顯はれしは即ち衆生の爲の報佛として光明十方を照し其本願の名號によりて如來を便り恩寵を被むる者は悉く攝取同化の縁に預らざるはなし。

近くは釋迦と現はれて如來慈父の恩寵を衆生に示さん爲佛法を開きて大悲の恩寵を衆生に教ゆ。

十劫正覺のミダ伽耶成道の釋迦の佛法は此の因果的にある衆生を因果にかなふ法則を以て衆生を救濟するの恩寵なり。此の世に佛法とし如來慈悲の教として世に行はるゝは即ち法縁の慈悲なり法縁の慈悲として顯はるゝも其本體は同じく絶対無縁の一大靈力の流行力をミダ釋迦として世に出でゝ衆生を攝取して慈父に歸せしめん爲の法縁なり。第二義は第一義より劣等なりと謂ふべからず如來には第一義と二義との別あるに非ずして第一義のみでは衆生に縁すること能はず依て因果の法則にかなふ理を以て衆生に慈悲を被らしむるのみ。

第三義衆生縁とは第一絶対の恩寵が因果律の世界即ち人間界に人佛出でて佛法といふ法縁を以て衆生を攝し此法によりて初めて慈悲如來の恩寵を被らしむる法は世に行はれるも個人個人は衆生縁によりて恩寵を發得するに至る。之れは佛法は世に流布すとも或は家庭に於て父母親友の誘導によりまたは教會に於て知識の親化によりて教へられ感得せられて自己に恩寵を發得す之衆生縁の恩寵と云ふ。衆生縁亦た一大恩寵が原動力なれども佛法として代代世に行はれるものが展轉して甲より乙に父より子に師より資に傳燈して世に行はるゝなり。甲の燭火を乙に點じて展轉することなり。然れども火の本體は宇宙に存在する火大なりその如くに絶対本然の一大靈力たる恩寵は常恒不變なれども衆生の信仰心に感傳して恩寵は其人の心靈的生命となりて光明的の生活をなすには因縁成熟するにあらざれば發得し難し。

恩寵發得の一二縁

宗教に正義の宗教と慈悲の宗教の二種あり。西洋にて猶太教と基督教甲は正義により乙は神の慈愛に本づき甲は神の戒律を守り乙は神の慈愛を本とするが如し。

佛敎もまた此と同じく釋迦教は戒律を基本とし彌陀教は信敎を宗とす。

佛教戒律主義は此土出世の釋尊より波羅提木叉即ち戒體が師より資に傳はり之を如來の法身とし假令釋尊入滅すとも法身の戒體は常住にして展轉して行はれ法身の壽命は竟に滅せず。波羅提木叉即ち戒體法身は眞實に發得して初めて眞實の活る慧命となるなり。活る佛者佛徒なり佛弟子なり。たとひ三衣身を裝ふも戒體法身發得するに非ざれば眞の佛徒に非ず。

戒に大小ありと雖も戒定慧を以て慧命とせざるなし。戒を得れば定慧も發得す。故に戒體法身の發得は佛教の聖靈感得、禪の見性と同じく靈の眞生命に入るの機關なり。

戒體の發得に二規定あり。律の文に云く一には傳燈相續發得と二に自誓得戒となり。傳燈師に依りて相續するは即ち甲の火を乙の燭に傳ふ如くに展轉傳燈して相續す。然るに此規定にも資弟の機已に熟して師の靈格に存在する靈活生命を資弟に傳燈す。故に師は親切篤實にして資の戒體を發得せしむべし。然らざれば發得し易すからず。

次に自誓得戒とは若し百里千里の中に傳燈の師なき時自から一心に誓を起して若し七日乃至七々日若し一年三年に修行修得して或は佛の相好を感見し又は花を見光明を感する等の靈感を得れば之自ら誓て戒體を發得すべし。

自誓傳燈發得何にても全く戒體發得して眞の靈的生命となる時

は功に於て同じきものと爲る。

慈悲を宗とする信仰の恩寵發得にまた二類あり。一は傳燈的發得二は自修的發得。傳燈的發得は師友善智識の指導の下に漸々に信念を養はる

人の信念を養ふ恩寵が靈を養ふことを小兒を養ふに例せば小兒の體を養ふ養分原料は日本なれば米または肉類等よりの滋養を攝取して此肉體を養ふ。然れども小兒には穀肉等が眞に自から消化するの營養機能未だ發達せず故に母が食して嬰兒の消化に適ふべき乳汁として與ふ。小兒は乳に由て養はる。然れども或時期に至れば自から穀肉等の養分を直接に攝取して營養と爲すことをうる如し。靈的發得の規定もまた同じく師友善智識は常に自から恩寵の靈食を享受したる信念の生命を保存す。自己の靈的信念を初心の求道者に感傳す。其の成熟に遲速の異ありと雖も求道者の至誠熱誠と師友の親切と相待つて全からば母の乳に依て養はるる兒の如くに靈的生命を發得することを得べし。此の感傳の規定に於て注意す可き事は若し師たる者單に言語文字の解説を傳ふ時は資もまた唯言説の領解のみを以てついに靈活生命ある信念を發得することを能はず故に求道者は名師を撰ぶの要あり。

斯の如きの規定によりて發得するを傳燈的發得と云ふ。次に自修發得とは自誓得戒と同じく傳燈の師を待たず自修的に如來の恩

龍を發得す。こは宗教的天才の如きは自己に靈的伏能より萌發せんとしつゝある資にて善導大師の如き淨土の變相を見て猛烈として奮起し若し神を斯る淨域に遷さざれば何に由つてか生死を脱せんと即ち淨土の變相を見て導師の心には欽慕の念禁じ難く如來の聖言は忘れ難く自己内心にミダを念し憶念常に止すついに自から發得したるが如く、宗教的天才はたとひ縁を藉ると雖も他の師友の指導を待たずして自から發得するものなり。また自修發得と云ふも拙勵勉力せざるべからず。自修的發得の機類は喩ば木と木と相摩擦して木より火を發するが如く他受的傳燈的發得の人は他の火を自己に傳ふるが如し。

何にしても全く恩寵が自己の生命となりて靈的生活に至らば足りぬべし。

かくまでにみめぐみふかき大ミオヤに

子はいかにしてつかへまつらむ

——上人遺詠——

清き心に生れ更るが一大事

宗教は實に人生一大事にて候。誠に「真劍に道を求むるにあらざれば佛教の眞光明を發見し難く候。さればこそ幾千の學問を修むるか或は一室に閉籠りむつかしき修行せざれば成せぬと云事も候。

只正眞にすなをに善智識の教へに隨ひて至誠心に修め候はば必ず新らしき宗教の光明を發見いたし申べく候。然らば宗教とはいかなる眞理を教ゆるものにて候哉となれば、宗教の宗と云は宗と云意味にて即ち宇宙には絶對的に尊き唯一の神尊在ます斯神尊は唯一にして無二無三、此尊き唯一の神尊を信じて一切を獻げて仕へ奉る教を宗教とは申候。然らば宇宙間に在ます唯一の尊格を釋尊はいかなる靈名を以て其神尊を號け玉ふかとなれば經に無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる處なりと。誠に此如來は有ゆる神また佛の中に於て本師本佛にしていか成神も及ぶものなし即して唯一の神尊なれども其絶對的に大なる御働を表はす爲に十二の御名を以て其御聖徳を示して在ます。然らば其尊とき如來を信じ候はばいか成大利を得べく候哉との御問には、私共の生得具有て生れたる心の垢汚がきよめられて清き心に生れ更り申候こゝが宗教の一大事の關門にて候。

若し如來の光明被むりて信心開發すれば、此身の上にはかはりしこと無之候へども心の奥底に最靈なる光明の照すありて心は廣くゆたかにして常に法悦の樂みを感じ申候。凭の如きの心の状態に相成候ことを光明生活と申候。あなたは物故し玉ひし亡夫君の御菩提の爲にもいざ是より一心に聖き光明の道を求め候へ。あなたが自から如來の光明を精神に被むりて光明の中の人と成り候て冥土に在ます亡き君を、あなたの心に受けつゝある光明の中に御誘引いたし候へ。是御亡夫君に對し最も仕え奉つる道にて候。實に宗教は人生の一大事にて候。縱令一百歳の壽を保つとも如來光明の中の人とならざれば闇より闇に入るべき外之れなく候。此光明を獲得候上は今世も光明中に清き生活を遂げ而して壽終の時、光明永しへに輝つゝある大ミオヤの御膝下に還ることに候。

先日あなたと御同行の御婦人はあなたの御知己にて候。實に御兩者共に宗教に入り候はゞ有望と信じ申候。若し御兩君共に光明の道を修め候はゞいかに美しき御心の生活に入る事ならんと存候。

あなたの如き心の金剛石を具有し乍ら之を空しく光輝を放つこと能はずして光陰をいたづらに只形の事のみにつかふて果る事は、いかに遺憾な事に候哉。凭く得難き寶石を空しく埋没してしまふは惜しき極に候。願くば御兩君共に、此聖き光明の道を求め光輝ある生たるべきやうに敢て御進め申候。

あなたよりも宜敷御傳相成候て共に道を修め玉はんことを御すいめ申候。

ミオヤの幼君を即位せしめ給へ

あなたの御手紙によれば自己は罪惡である己を捨て、絶對的服従でなければ救済は得られぬとの信仰と、また一方積極的に自己を飽くまでに發揮すべき教育とは常に内心の衝突に少からぬ煩悶をなされどの事。考ふるに佛教に人の精神に對する二方面の信仰の内消極的方面のみの宗教教育を受けたのが自然とあなたの御心を惱すのであると存じます。就ては釋尊も太子たりし時物質上には尊きこと天子の位、富四海を保つべきまた榮耀と榮花とは上なき位置に在ませども凭の物質上の幸福は高尚なる理想を以て靈的に飢えたる太子の精神を満足させることはできぬ。太子は肉の幸福を與ふる如きの物は實に還つて苦と空と無常と無我とにして之を貪るが如きは己を惡魔の網に囚はれる様な感じをする故に毫もそれらを幸福とは思なれなかつた。そこで太子は奮然と起つて王位を破れくつの如くに棄捐して山に入つて道を學び勤苦六年、十二月八日の曉に無明生死の夢醒て初めて發見したる新天地の中に大安樂と自由とを得なされた。宮中の物質上の幸福は還つて太子の精神上の煩悶の器となり後に乞食道士の物質上に一鉢の貯なき

沙門の精神には無上の光榮と無比の幸福とを感ぜり。大宇宙に充滿せる無盡の靈福は悉く我有にて内心の満足は真に無上の靈福を感ぜ玉へり。釋尊の宗教的信念の内容の消息を洩し玉へる無量壽經の序説に於て正しく我等衆生の信仰心の積極方面は斯くあれかしとて模範を示し給へり。

釋尊が彌陀三昧に入玉ふた爾時に釋尊の精神世界は我等が肉眼に見るべき天地とは全く異にして絶對無限の靈界の清淨眞天に無量光如來は赫々たる太陽として無量の相好光明普く法界を照らし玉ふ其彌陀の光明が反映せる釋尊の相好は譬へば太陽が満月に反映する如くなり。經に爾時に世尊諸根悦豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如く黄金の色身萬徳圓滿の相麗はしく御血色は殊に清らかに玲瓏玉の如く光顔は魏々として威神極りなきは是れさながら彌陀の光明に反映せる釋尊の御すがたなり。

兜の如く模範を示し玉へる釋尊の教に隨うて彌陀の光明に依て復活する時はいかん。我等の無明と染汚と苦惱と罪惡とは是彌絶の光明によりて脱却せらるべき消極的方面にて清淨と歡喜と智慧と不斷とに靈化し玉ふは積極的方面なり。

彌陀の光明は實に是人の精神をして現在を通じて永遠に活す靈力なり。現在より精神的に眞の幸福と光榮とを興へ而してすべて

の活動に無限の力を與え玉ふ靈徳なり。凡そ有ゆる宗教中に無量壽經中に現はれたる釋尊の御身に示されたる宗教心の模範ほど積極的に活々したるものは他に無いと思ふ。

諸君よ、あなたの御頭の中臺の玉座に在ます靈性は本大ミオヤの王子に在ませども未だ幼にして全身心を征服し統禦する權威を得玉はざるなり。されば宇宙の大ミオヤの光明を被むりてを以てして即位せしめて全身心を統率してミオヤの光明の下に自己の使命を果すべく無限の力を興へらるゝやうに常に聖名を稱へて祈り玉へ。

假のやど

(一)

此世は實にも樂しける我世	我世とばかり思ひつゝ
花よ月よと眺めては	あつさ寒さとかたりしも
いつの間にかは移りゆく	日々にもとまる我いのち
此世はいはゞ假りのやど	いつまでこゝに有ぬべき
人は此世に生れ來て	何れに歸趣すとも知らで
開よりやみにさまよひて	くらきに沈むあはれさよ
かりの此身といひながら	心はとはに我が物と

かたく執して大かたは
能く思ひ見よ世の中は
必らず人に返すべき理を

(二)

天地に借たる物ならば
今我この身は何れより
四支五體を始めとし
天地自然の五大なる
かりたる物に有るなれば
自然のおきてを知るときは
我身につきし所有をば
愚かなる身のかなしきは
しりがほにして知らぬ哉
持ちはてぬべき身と財に
心をなやめ身をいため
金は山ほど積もるとも
つゝに此身の終りには
今まで我身と認めし身さへ
かゝる場合に臨んでは

まことに覺りし人はなし
人に借たる物はみな

もとの天地に還すべし
借たる物と知るやいかに
五臟六腑ことごとく
地水火風空にして
必らず元にかへすべき
身をさへ己が有ならず
何かは己が有ならん
すべては云はゞ假ものと
我欲に目のなき輩は
飽くこともなく貪ぼりて
命をまでにちよめける
財はくらに満るとも
つき随ふものやある
元の土くれに返すなり
悲しみ悔むも甲斐やある

我につきそうものとは
業のたき木をつくりては

自業自得

無明のなかに受けし身は
自からつくりし罪とがの
たまく病にかゝりなば
また災難にあふ時は
己が因果をかへり見す
まことの神やみほとけは
因果の道理をよそにして
神やほとけに頼みても
石についても死なじとて
無常の殺鬼はいとむごく
はげしき業風吹き來り
地獄の熱火に投せられ
苦しみなやみいつまでも

一生つくりし罪とがの
消えぬ獄火にやかるなれ

因縁因果の理にくらく
己を苦しむをさとりえず
神や佛の加持祈禱
星除方角除なご
かなしむ時の神だのみ
眞理の光りにましませば
まげて願ふもしるしなし
宿業已に定まりぬ
心は闇に執すれど
慈悲もなさけも有ざれば
たましの所をかへぬれば
あらゆる苦毒の中に入り
解やむ時はなかるべし

釋尊出世

無明の闇のいと深く

流轉生死の極みなき

苦界の衆生を憐みて
 三千世界に唯獨り
 はなちて此世を照します
 八相成道示現して
 大みほとけの教のみ
 救の道を教へんと
 三世に徹るみ光を
 釋迦牟尼如来出でまして
 衆生濟度の道ときし
 永恒不變の眞理なり

ミオヤの慈悲

法身あみだ如来こそ
 有としあらゆる物として
 衆生の身心ことごとく
 天地よろづの物をもて
 我ら衆生は法身の
 無明のやみにさまよひて
 子をわはれみの親ごゝろ
 方便身を示しては
 迷へる子らを救ふべき
 五劫に思をこらしては
 大悲の本願建てたまひ
 衆生の爲と聞ときは
 今は本願成就して
 天地よろづのミオヤなり
 御手にかゝらぬ物ぞなし
 皆御佛の分子にて
 我らをはぐくみ玉ふなり
 み子にはあれど始なき
 生死流轉のきはもなく
 慈悲のみむねの遺漸なく
 法藏ぼさつとへりくだり
 だてをこゝにめぐらして
 兆載永劫功をつみ
 六八のちかひ悉く
 御慈悲のほどぞ尊けれ
 十方淨土に超れたる

極樂淨土を莊嚴し
 尊體無量の相好の
 世界を照し念佛の
 我らミオヤをしらすして
 ミオヤのなさけ深ければ
 一向みむねにしたがはば
 我ら衆生を待ち玉ふ
 光明遍ねく十方の
 衆生を攝取し玉へり
 生死の海に沈みしも
 むかしの罪を悔あらため
 必らず救ひ玉ふなり

ミオヤのみもと

みだの淨土に生るれば
 壽命もつくることもなく
 八功德池をながむれば
 金の砂はかゞやきて
 蓮の花は咲きにほひ
 四邊のらんまを下りては
 深淺こゝろのまゝにして
 身心共に清らげく
 如来説法の會に入れば
 觀音勢至を始めとし
 無上の法味を享受して
 菩薩の相好極みなく
 無量の功德備はりて
 樂しみ極みなかるべし
 七寶階きららかに
 澄める水にぞ照りとふる
 色光燦爛かゞやけり
 池に浴るばさつあり
 温涼調和身に適ひ
 樂しさ極みなかりげり
 法王高座のみもとにて
 無量のぼさつ圍繞せり
 ますく佛道増進し
 智恵神通も備はりて

つゐには無上覺をえて
 彼處は不老不死のさと
 我ら無始よりさまよひて
 生々世々にうけし苦も
 今度いかなる宿善に
 まねきの聲に驚きて
 慈悲のみもとに入ぬれば

衆生濟度極もなし
 四難八苦の名だになく
 六のちまたを經めぐりて
 自らしらで經たりしを
 催ふされてや大ミオヤの
 長夜の眠りの夢さめぬ
 實には本のミオヤなり

大正十一年七月一日印刷發行

隔月發行一ヶ年前金壹圓貳拾錢

編輯兼發行人 山崎 辨 成

東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

印刷人 秋場 熊太 郎

東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地

發行所 ミオヤのひかり社

振替東京四九三四八番